

現代の

ことば

やすなり
安成

てつぞう
哲三

愛知県の奥三河の山あいには、四谷千枚田という古い棚田がある。日本の棚田百選にも入っており、山の斜面に美しい景観を作っている。その棚田で米づくりをしている友人のお誘いで、5月末の一日、田植えに参加した。無農薬・除草剤なしの田の泥はきめ細かく、はだして入ると、足に柔らかに気持ちがいい。山の緑に囲まれ、小鳥の声を聞きながら、おたまじゃくしやミズスマシが泳ぎ回る田に苗を植える気分は上々だ。

田ごとに山の溪流から水を引いているが、その水量の調整がむづかしい。水が少ないと泥が乾いてしまうが、多すぎると水浸しで苗がうまく泥につかず、倒れたりしてしまふ。初めは楽しくやっていたが、2時間もやるとさすがに疲れてくる。次第に腰や腿が痛くなってくる。手伝いに来は、長年米作りをしてきただけにさすがに手際よく、すでに朝から2枚の田植えを済ませ、ふうふう言っている私を

棚田の田植えから学ぶ



笑いながら、「田植えは一番楽だね」とひと言。

田植えの後は夏の草取りが待っている。虫害も気になるし、天候も気がかりだ。秋の収穫までいろんな苦労があることを田植えという作業の体験から垣間見ることが出来る。

虫害について興味深い話をその友人から聞いた。何年か前、この棚田一帯は、カメムシの大発生で大きな被害を受けた。無農薬を通しては、友人とその隣の田だけだが、不思議なことに彼らの田

んぼだけが被害を受けなかったという。棚田の保全が叫ばれているが、伝統的な里山農業の維持はなかなか難しい。この虫害の例は、水田の生態系を考える上で、重要な問題を提起しているようである。

いずれにせよ、たった1日の田植え体験であつたが、いつも食べているおいしいお米は、農家の方々の1年を通して大変な苦労と汗の結晶であることをあらためて実感することができた。

さて、米作りを続けているその友人とは、実は中国人の女性留学生である。国費留学生として日本に来た彼女は、大学を卒業後、ある大企業に正社員として就職し、数年間、営業の仕事バリバリとこなしていたが、さらに勉強がし

なくなり、名古屋の大学院に入学した。環境政策論を専攻し、今も博士号をめざして研究を続けている。

米作りを始めたのは、もともと山登りなどの自然好きで田舎暮らしをしたい気持ちがあつたからだ。田んぼで自然に囲まれて作業している時が一番幸せという。同時に、農業を通して、環境問題を全体として考えたいという気持ちも強い。奨学金も切れた彼女は、学費・生活費を、国際会議での中国語・日本語の同時通訳や中国からの視察団の通訳などの仕事で稼いでいる。棚田に近い愛知県東部の町に住み、研究と米作りと通訳の仕事で生活している。将来は、農業と環境の問題を解決するための日本と中国の交流事業をやっていきたいとのこと。

地域社会にもすっかり溶けこんだ彼女は、棚田での米作りを、地産地消の一環にしようとして、棚田で生産されたお米を地元のお米屋さんなどで流通させる努力もしている。棚田を貸してくれた農家の老夫婦には、実の娘のように可愛がられ、また頼りにされているようである。

田植えの翌日、彼女からメールがあり、私のような素人の植えた苗の一部が土についておらず倒れていたのを、知り合いのおばさんが見つけたが、すべてきれいに植え直してくれたという。これも地域社会の一員として信頼を得ている彼女のおかげであろう。

(総合地球環境学研究所長・地球環境学)